

和漢薬治療中の関節リウマチ患者221名の 上部消化管内視鏡所見の検討

○酒井 伸也¹⁾、嶋田 豊²⁾、萬谷 直樹³⁾、小暮 敏明³⁾、後藤 博三¹⁾、
柴原 直利¹⁾、寺澤 捷年²⁾

富山医科薬科大学・和漢薬研究所・漢方診断学部門¹⁾、

富山医科薬科大学・医学部・和漢診療学講座²⁾、群馬大学・医学部・統合和漢診療学講座³⁾

〔目的〕

和漢薬治療中の関節リウマチ(RA)患者の胃十二指腸病変を検討した。

〔方法〕

当科で和漢薬治療中のRA患者のうち、1980年1月から2000年10月までに上部消化管内視鏡検査を施行した221例について内視鏡所見とRAの活動度、治療内容との関連を検討した。

〔結果〕

対象221例中、活動性の消化性潰瘍は10例(4.5%)。内訳は胃潰瘍9例、十二指腸潰瘍3例であった。潰瘍癒痕は21例(9.5%)。内訳は胃潰瘍癒痕16例、十二指腸癒痕5例であった。その他、びらん性変化が12例(5.4%)、早期胃癌が4例(1.8%)に認められた。非ステロイド性消炎鎮痛剤(NSAIDs)またはステロイド剤(ス剤)併用治療群(107例)と和漢薬単独治療群(96例)で比較検討すると、前者の活動性胃十二指腸潰瘍合併例が10例(9.3%)であるのに対し、後者では2例(2.1%)とNSAIDsまたはス剤併用群に有意に多く活動性潰瘍が合併していた。

〔考察〕

1999年 Cheatum らは NSAIDs 服用中の RA 患者の胃十二指腸病変を内視鏡検査で検討し、1009例中239例(23.6%)に胃又は十二指腸潰瘍があったことを報告している。RA患者の胃十二指腸潰瘍の合併頻度については、Farah らの185例中67例(1988年)、塩川らの1008例中175例(1991年)などがあり、いずれも NSAIDs 投与との関連性が指摘されている。今回の検討では、221例中10例とこれらの報告と比較して少ない傾向にあった。和漢薬を中心とした治療で、NSAIDs 使用を最小限にとどめることにより、消化性潰瘍の合併を減らしうる可能性が示唆された。